

会議記録(概要)

会議名	令和2年 第3回三田市文化ビジョン検討委員会
日時	令和2年7月14日(火) 10時00分から11時55分
場所	三田市役所 3階 302A会議室
出席者	田辺委員長、木村副委員長、阪本委員、加藤委員、服部委員、小中委員、門垣委員、山口委員、林委員、柳井委員 (10名/11名)
事務局等	矢萩広報交流政策監 西田地域創生部長 印藤同部市民協働室長 (以下、部・室名を省略) 横溝文化スポーツ課長、畑同課副課長、山崎同課課長補佐、 森鼻同課係長 (コンサルティング業者) ㈱地域社会研究所 酒井
傍聴者	なし
添付資料	レジュメ、資料4-4変更、資料6変更、資料10、資料11

会議概要

1 開会(10:00~)

部長挨拶

新型コロナウイルス感染症対策のため本日(7月)に至るまで開催できなかった。再開にあたり、リモート・ズーム会議も検討したが、多角的に議論し直接ご意見を頂戴したいとの考えから、今回は顔を合わせての通常の会議形式とさせていただいた。

本日は5か月経過後の会議であることから、報告事項、議事録を踏まえながら、先ずは第1回、2回の振り返りをさせていただき、アンケート結果についても、ご意見、ご議論をお願いしたい。

矢萩広報・交流政策監挨拶

人が関わるものすべてが文化だとすれば、大きな内容を1つに集約していくことは大変だと考えている。この多様な三田の文化をまとめる文化ビジョンに期待している。新しい三田の魅力を多くの市民に知っていただきけるよう発信するため、いっしょに勉強していきたい。

2 報告事項

(1) 会議の成立

過半数以上出席につき成立

(2) 傍聴報告

傍聴者なし

(3) 三田市文化ビジョン検討委員会スケジュールの変更【資料 4-4 変更】

新型コロナウイルス感染症対策の影響で、設定テーマについての審議が当初スケジュールどおりに進んでいない。従って、以後の予定を 3 か月遅らせ、令和 2 年度末までに審議を完了し素案を作成、令和 3 年 4 月にパブリックコメント、5 月に答申を行ない、7 月から三田市文化ビジョンを施行するようスケジュールの見直しを行いたい。

【質疑】 なし ⇒ 了承

(4) 分科会担当委員【資料 6 の変更】

第 2 回委員会において設置した分科会の「⑥推進基盤の充実」の主旨は「⑤文化活動支援のあり方」に包括できるとの判断から「⑤文化活動支援のあり方」に統合したい。

【質疑】 副委員長：テーマ①「文化施策の現状と課題」の担当に副委員長を追加されたい。 ⇒ 了承

(5) 第 1・2 回委員会の振り返り（事務局説明）【資料 10】

【質疑】 なし

3 協議事項

(1) アンケート調査結果報告についての検討【資料 11】

<事務局から説明>

事務局 市民や団体の活動や意識について、どのような状況にあるかの資料としてご活用いただきたい。文化芸術活動の普遍性と選択制のバランスをどのようにしていくかが政策の課題となる。

- ・アンケートの対象年齢、調査方法等説明
- ・回答の傾向として、女性の比率が高い、ニュータウン地区居住者の比率が高い、文化に関心・活動がない方の比率が高い、演じるのではなく鑑賞経験者の方の比率が高い、これらの点に留意して分析する必要がある。
- ・選択制の回答のなかには一定のバイアスがかかっていると考えられる。文科芸術活動に「関心がない・活動していない」の回答 78%に対し、「鑑賞経験している」の回答が 78.7%あるように、受け身の傾向が出ており、二重のバイアスがかかっているということを前提としていただきたい。

委員 市民アンケートでは、郷の音ホールの料金についてたくさんの意見が出されているが、料金体制がわかる資料があれば、他市との比較により設定が適正であるかどうかの判断材料になる。

事務局 郷の音ホールについては第 7 回開催の委員会で重点的にご審議いただく予定なので、他市との比較も含め資料として提示する。

委員 演者として郷の音ホールを利用する側と、鑑賞する側では料金について、感じ方が異なっているのではないか。市民センターは練習等で活発に利用されているが、成果発表は郷の音ホールで行いたいと思っている人たちの料金に対する感覚と、鑑賞する側の感覚は全く異なっているので、その辺りを市民がどう

感じているのかは重要なことだと思う。

委員長 アンケート結果では、積極的参加が4人に1人の割合であるのに対して、鑑賞している人の割合は4人に3人と高くなっていることから、料金についてもそれらの両面を分けて知りたい。たくさん鑑賞に来ていただけるから、やりがいもあるので、受身的参加者が三田の文化活動を支えているという一面もできるだけ伝えていく必要がある。主体者と受け身の側の二つに分けて料金体系を考える必要がある。

委員 市民アンケートの回答率が51%、団体アンケートが85.6%と差がみられるが、これをどのように受け止めているか。

事務局 一般的に市民アンケートの回答率は半分程度であることが多いが、三田市民の回答率は他のアンケートでも比較的高いと言われている。今回のアンケートは文化芸術に特化しており、また、受身的立場の人もいることからすれば、回答率は低いとは言えないと考えている。一方で団体アンケートは、狭義の文化活動に限定せず、広く市民活動団体を対象としており、団体の将来を考えたときに、しっかりと発言したいと思われたこと、また、主体的に社会に関わっていることで意識も高いことから回答率が高くなったと思われる。

委員長 市民アンケートの対象者は無作為抽出であり、積極的ではないと回答した約4分の3の市民が含まれている。一方で、団体アンケートは文化活動を実践している団体が対象なので、回収率はもっと差が出てもおかしくない。その点を考慮すると今回の市民アンケートの回答率は結構高いと思われる。

委員 市民アンケートでは、郷の音ホールで何をしているのかわからないという意見もあるが、催しを実施している側としては、情報はあふれていると思っている。郷の音ホール開館から12年も経過しているが、未だに行ったことがない人が結構いる現実や、施設そのものが不要という意見まであり、まだ市民一人ひとりに認知されていないと感じている。アンケートでは、月1回発行の市広報誌「伸びゆく三田」から情報を得ている人が多いが、郷の音ホールのイベントは掲載されていない。指定管理者に委託しているとは言え、市としてもっと広報に取り組んでほしい。

事務局 郷の音ホールの広報については、指定管理者の契約条件に広報業務が含まれているので、市の広報誌には敢えて掲載していない。紙面が限られているので市内すべてのイベントを掲載することは難しい。ただ、指定管理者制度の施設であっても独自の情報媒体がない施設の情報は掲載している。郷の音ホールでは、年2回、全世帯に新聞折り込みで情報を提供している。また、市のホームページにリンクしているので、興味や関心がある人は情報を得られていると思う。

委員 興味がない人はわざわざ情報を取りにいかないのでは、そういう人に、行ってみようと思わせるような情報提供の仕方が重要ではないか。伊丹市などでは、すべての行事が一覧になっている。

委員 全戸配布は指定管理者側の努力であり、今後どのようにしていくかが大きな課題だと思う。「伸びゆく三田」は非常に重要な情報ツールであるが、掲載スペースは小さくなる。

委員 市民アンケートの情報入手方法では「伸びゆく三田」の比率が圧倒的に高く

なっており、郷の音ホールの情報も掲載することが理想的ではないか。

委員 60代から80代がアンケート回答者の一定割合を占めているので、広報誌が多い結果となっているのではないかと。若い世代ではTwitterを見ているという結果も出ており、情報をどこに届けたいのかを明確にしながらか広報戦略を組み立てる必要がある。また、イベントの情報発信は大切だが、集いの場としてのニーズも回答からうかがえることから、イベントに関係なく、郷の音ホールに行こうという取り組みが必要ではないか。

委員長 郷の音ホールで、イベント関係以外で集まっている人はどの程度あるのか。

事務局 会議室他があるので、任意団体や民間企業は利用している。和室があるが利用が少なく、そういう点でも広報が必要だと考えている。

委員長 1階レストランだけの利用ニーズはあるのか。

事務局 メニューは少なめで軽食程度である。

委員 大掛かりな料理を作るには厨房の設備が不十分だと聞いたことがある。

委員 郷の音ホールを知らないという回答があるが、日頃は地域にある市民センターを利用している人が、郷の音ホールについては特別視して、利用したくないのではなく、縁がない、利用できないと自分なりに区別してしまっている人が多いのではないかと。それが郷の音ホールのジレンマの一つであると踏まえた上で、あり方を検討していくことが重要である。

委員長 郷の音ホールのあり方を考えるにあたり、委員会資料でも情報発信の強化が第一となっている。指定管理の施設なので市として情報発信をしていくことはできないのか。また、市に施設一覧のような情報はないのか？

事務局 郷の音ホールは、一定の収益が見込めるため自立が可能であるということと、発信する情報量が多いことから、指定管理者が主体的に情報発信するとなっている。指定管理者制度の対象だからということではなく、ホールの特徴を鑑みてそのようになっている。他の指定管理施設については「伸びゆく三田」に簡潔な記事を掲載している。市のイベント情報は、市のホームページ内のイベントカレンダーに各所管課の担当が自由に書き込む方法で掲載しているが、必ずしも十分な情報提供ではない。

副委員長 広報についての考え方は整理されており、郷の音ホールもしっかりと情報発信をしていると思う。ただ、市民全体に訴える媒体である「伸びゆく三田」に掲載すれば郷の音ホールの認知度もステータスも上がるので、収入を増やそうと思えば、例えば目玉のイベントだけでも掲載する方がよいのではないかと。県の広報誌には、指定管理者である兵庫県立芸術文化センターの情報も載せている。

政策監 広報誌のリニューアルを検討しているなかで、これまでのお知らせ型の情報提供はやめ、市民の皆さんに関わってもらって、活用していただけるような広報媒体にしたいと考え進めている。当然、一定量の情報の告知は残していく。郷の音ホールの活動について、市民がどのように利活用できているかということ載せるのであれば、リニューアル後のコンテンツ対象になると思う。

委員 「伸びゆく三田」は市民全員が目にし、情報取得できる媒体なので、数行の情報であっても市民に浸透すると思う。

委員長 郷の音ホールは全戸配布しているプリントで詳しい情報を提供できるが、

「伸びゆく三田」にはそこまで載せられないので、郷の音ホール発行のプリントにつなぐような内容を掲載することには意味があるのではないか。郷の音ホールの当初の原則（指定管理者による広報業務）があっても、経済的負担も考えれば柔軟に変えていけばどうか。アンケート結果では情報を得る媒体の比率が「伸びゆく三田」は41.8%と高いが、これからは高いから載せるという考え方ではなく、TwitterやFacebookなどで情報を得る人たちにどのように働きかけるかが重要ではないか。

政策監 SNSなど、新しい情報媒体による、若年層への訴求は重要と考えている。

副委員長 「伸びゆく三田」のリニューアルを検討中ということであるが、情報発信型と情報交流型の異なる媒体を作るのが良いのか、その辺りも含めて検討していただきたい。

政策監 告知としての機能がなくなるわけではなく、ただ単に市役所の情報を載せるような伝達の媒体ではないようにしたいと考えている。郷の音ホールでもユニークな活動があれば積極的に取り上げていきたい。

委員 情報取得の媒体として「伸びゆく三田」が突出している状況なので、PRの明確化が必要で、年代層に合わせてうまく情報発信していく必要がある。また、PRの対象となる企画自体もどこにでもあるものではなく、皆がこっちを向けるような起爆剤となる得る企画がほしい。鑑賞者が一緒に参加するイベントができればと思っている。今なら、e-sportsも考えられる。郷の音ホールの屋外でマルシェを開いているが、もっと広報することで、より多くの人に来ていただけるのではないかと、そうなれば近隣の店も潤う。

委員長 いい意味で「奇抜な」企画が必要。

委員 今は、真面目なイベントが多いなかで、そういう（奇抜な）企画が年に1、2回でもあれば、参加者も増えるのではないかと。

委員 いわゆる「見える化」の促進が重要。郷の音ホールで実施したことの一部はホームページで紹介しているがテキストと静止画であり、動画での発信が必要ではないか。先日の七夕祭りも文字で読んだだけでは想像できないので、イベント終了後に動画で見せることで、以後の活動につながるのではないかと。そうすると若い世代、働く人たちへの訴求ができて文化意識が高まる。

委員 確かに動画であれば見てしまう。コンサートでもトークでも著作権の問題はあると思うが、動画配信は必要性を感じる。

委員 例えば災害について、発信側はあらゆる手段で情報伝達を考えている、同様に、文化についても様々な手法で、すべての世代に発信できるようにすべきではないか。市民アンケートの回答では、男性はラジオをよく聞いているようなので、合わせて発信する内容を変えていけばよいと思う。感覚的にはポスターをあまり見かけないので、貼る場所の検討も必要である。

委員長 ホームページ（のテキスト、画像情報）は原則、紙媒体と同じだと思っている。今は、YouTube等の動画が有効な手法ではないか。個人的にはパソコンを使っていないが、市民アンケートの年代層別の結果をみてもそう思われる。

委員 私もイメージしているのはYouTubeであり、瞬間的に内容がわかるのが利点である。

副委員長 今回の新型コロナ感染症の影響で、県立芸術文化協会でもアーティスト

が発信する動画の作成などについて助成金を出しており、非常に応募が多い。このような方法は、これからも定着していくのではないか。今後は、中高年でも（動画作成ツールやネット環境を）使えるようになると思うので、そちらにウエイトをシフトすべきではないか。

委員 アンケート結果で、市の文化の担い手についての関心は、50代から80代に大きなシェアがあるが、比率の少ない20代から40代でも関心はあると思うので、スマホ文化を手法として取り入れるべきだと思う。

委員 情報をどこで入手するかを探すことから始めるとなると、日々忙しいので、目につくのは「伸びゆく三田」であり、開いても文章ばかりで結局読まないで終わってしまっている。写真などが目につく構成であればいいが（文字が多いと）インパクトに欠ける印象がある。情報入手のため、どこを見ればよいのかわかりにくいところがネックになっている。

委員長 市の文化芸術活動に関する情報は、これだけあるということを「伸びゆく三田」に一覧の形で載せてはどうか。

委員 アンケートでは、郷の音ホールが駅から遠いと言われているが、他市等の施設に比べると駅からは近い。この意見から三田市がクルマ社会なのだとわかる。徒歩15分はすごく遠いという意識がある地域だと思う。クルマ中心の社会は20年後には考えられない。高齢者も子どもも歩いて行ける場所になっていかないといけない。そういう意味ではマルシェのようなイベントの時だけ行くのではなく、日常的にカフェに行くなど、とりあえずその場所に行ったときに、実施しているイベントを知るような方法が良いのではないか。情報発信も重要であるが、ふらっとその場所に来てもらえるような地域づくり、まちづくりのビジョンが必要。現状では、クルマを使わない高齢者や子どもにとっては、ハードルの高い施設になっていると思う。

委員 三田少年少女合唱団の団長をしているが、団員60人のなかでクルマ利用が98%。団員募集のときに、クルマで送迎できるかも条件になっている。子ども達だけが自身の意思で会場には行くことはできないので、出演する側としても企画を考えていく必要があると思っている。他の委員の意見にあった、魅力的な企画は今後を考える上で重要。市民アンケートの結果でも郷の音ホールを利用したことがない理由に、「魅力的なものがない」の回答が大変多い。2番目に「文化系の活動に興味・関心がない」となっている。この2つの回答者は、告知が届いていたとしても、面白いと思ってもらえる内容でなければ、会場まで来ていただけないと思う。我々、実演家としては、そういう人たちに向けて、興味を持ってもらえる内容を、意識を変えて打ち出していかなければならない。

委員長 ビジネスも同様に、良いものを作っているのに売れないという発想ではなく欲しい物を作っていないから売れないのだと考えなければならぬ。文化活動でもそういうマーケティングリサーチは必要ではないか。

委員 良いことをやっているから来てよ、という態度ではいけない。判断するのは受け手側なので。子どもについては習い事がたくさんあるなかでの選択になり、選択してもらえるように打ち出すアイデアが求められている。Twitter、Facebookを活用するなかで、これまで想像できなかったものが生まれると思う。

委員 若い人に来てもらえるように有名な音楽家（アーティスト）を呼ぶとか、お

笑いタレントに来てもらうなどが考えられるが、一方で、文化団体には邦楽をしなければならないという固定化された意見があると思われ、背景に芸術文化に対する「あるべき論」が見える。ヨーロッパの文化都市などでは、芸術文化のイベントではその周辺、例えば、地域の料理の紹介などもあって、地域住民の異なる興味をつなげるような仕組みになっている。三田市でも地域の違いで分断されている人たちを集めるような面白いイベント、奇抜なイベントを企画すると同時に、分断そのものを解消する支援も必要ではないか。

委員長 これまでのご意見をうかがっていると、三田市でどういうイベントを実施するかを話し合う企画委員会がないと難しいのではないかと。従来どおりの考え方では、次に踏み出せない。今後は、そういうことも考えていただければと思う。

事務局 アンケート結果からも、主体的に取り組んでいる内容によって、郷の音ホールの活用の仕方が全く異なっていることがうかがえる。また、個人の属性、世代によっても、捉え方やニーズが異なっている。このような意識の違いをどのようにしていくのかがポイントになると思っている。第1回の委員会で、そもそも文化芸術をどのように定義するのかという議論があったが、これについても委員会でご意見をいただきたい。

副委員長 アンケートをみると、単なる文化ということではなく、田園都市、歴史、伝統などを大切にするなど、多様な意見が出されている。これらを踏まえれば三田市らしい文化ビジョンになるのではないかと。そのなかで郷の音ホールを公演、展示の場にするのか、歴史講演など交流の場としての要素をもう少し強くするので位置付けも変わってくる。多目的なホールになると専門性がなくなるといった課題も出てくると思うので議論は必要である。

委員 分断されているものが交流すれば多様性になるので、複数の拠点を交流させればいろいろなことができるのではないかと。文化を多様に定義するのが良いと思っている。

委員 郷の音ホールが文化拠点であることは明確である。一方で、市民の多くが活用しているのは市民センターであって地域である。市の郷土史、祭りなどは県下でも歴史は古いが、高齢化で伝承が難しくなっている。50代、60代の人には伝承への教育が必要で、70代、80代の人にはそれを大いに享受し楽しんでもらうという高齢者のなかでも役割分担があるのではないかと。非常に素晴らしい三田市史の成果も担い手（伝承者）の後継者不足で悩んでいるが、アーカイブで保存し、オンライン化していく必要がある。10年も経てばそういうプロセスが生きてくると思われ、地域文化の伝承には手法の変化が求められている。また、with コロナ、after コロナで、集客と人の命を守るという両者を、これから考えていく必要がある。

委員長 文化芸術のビジョンについて、最初は「芸術」の表記はなかったが、話し合いのなかで、文化は芸術文化だけではないという考えから、芸術文化とは異なる意味で「文化芸術」とした。広い意味での文化のなかには芸術文化があり、対極に生活文化がある。郷の音ホールにもアートなどの芸術文化がある一方で、生活に密着した地域文化と普遍的な日本文化がある。その2つを結び併せていくという点で、文化芸術と表現しているのは、議論をしていく上で有効だと考

えている。有名な人に来てもらうのは、全国のホールで実施していることなので、郷の音ホールでないとできないことを考えたい。そういう努力が必要である。今はまだ入り口の段階だが、今後、委員会でまとめていきたい。

委員 三田市では文化活動が盛んで、特に、アマチュアの趣味の延長線上で楽しんでいる方がたくさんいる。一方で、プロの音楽家もおられる。プロの音楽家協会はないが、そのような人たちの表現の仕方、活動してもらう仕組みが必要ではないか。アマチュアとプロが別々になっているが郷の音ホールで実演するということでは一緒なので、大きな文化活動として取り組めないものか。

委員長 市にプロの方を把握するリストはあるのか。

事務局 市が整備したリストとしては持っていない。郷の音ホールは持っている。

委員長 そういうリストは必要ではないか。

委員 文化ビジョンをまとめていくには、アマチュアのパワーとプロのパワーが必要で、それを郷の音ホールの指定管理者がどのように取り入れていくかも大事だが、いい企画にするためには指定管理者任せではだめで、市の役割もあるのではないか。

委員長 市役所・事務局サイドは、都合良く郷の音ホールに任せて、自己責任を取っていない印象がある。これは改めてもらわないといけない。指定管理者と丁々発止でやりあえるような姿勢を市は持っていなければならない。

委員 財団がある市では、そこが元締めになって、イベントを打ち出している印象がある。そういう市で市民団体が何かやろうとすると、入り込みにくいと感じるが、三田市では、市民発信のイベントが実現しやすい環境なので、それは大いに利用すべきだと思っている。20代から40代の三田にゆかりのあるプロの人たちが何か形を作って、発信していくということが重要で、ここに将来の可能性が見えるのではないか。自分としても働きかけたいと思っている。

委員長 両面が必要だと思う。

委員 確かに、宝塚市、川西市などには文化財団があって、そこですべて実施管理しているが、三田市は文化財団がない分、身軽で、我々が自由にできる面がある。しかし、プロの音楽家、アマチュアの協会、郷の音ホールの指定管理者、市が集まって議論をしているかというところではなく、個々が良いと思ったことをやっている。もう少し総合力を発揮できるような仕組みになれば、三田の強みを打ち出した、いい企画ができるのではないか。

委員長 そういう仕組みを実現していくのもこの委員会が出す1つの案だと思う。以前、宝塚市の文化財団の理事長をしていたが、宝塚市のホールの客席数はいずれも300席程度で、郷の音ホールのキャパシティが羨ましかった。宝塚市はいろいろ取り組んでいるように見えるが、そのような実情もある。宝塚市のホールができた当時はバブルの時代で、文化活動はお金に関係なく取り組むように言われていたが、経済が傾きだすと300席のホールでは、イベントで収益が見込めないのが現実であり、そういう苦しみのなかにいた。三田市には、あれだけのホールがあるのだから、やろうと思えばやれる。そのためには仕組みが必要であり、それをこれから作っていくということだと思う。赤穂市では、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターのお母様が赤穂市の人で、故郷に貢献したいということで毎年、赤穂市（姫路市と1年交代）でコ

ンサートを開いておられる。川西市でもウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏家の奥さんが日本人で、このネットワークを通じて夏休みの里帰りの時に始めたコンサートが定着している。三田市でも人材をしっかり把握すれば、こういうことができるのではないか。

委員 質的な向上が重要だと思う。宝塚は財団があることで1つ1つのイベントの質が高い。質の高いものを今の三田市の仕組みのなかで、どう生み出していかということだと思う。

委員長 宝塚市の財団の強みは人脈が豊富なことである。国際的な合唱コンクールの開催を呼びかければ実現する。また、阪急の沿線で、音楽課程のある神戸女学院の音楽部とタイアップして、ベガホールでオーケストラの演奏会をするようになった。県立西宮高等学校に県下唯一の音楽科があるが、コンサートを始めたら、育友会の人たち、大学のOB会が、結構活動してくれている。三田市には関西学院大学のキャンパスもあるので、活動に生かせるのではないか。湊川短期大学の活動もあると思うので、大学の合唱に来てもらうなど、お互いを高めていけると思う。そのためにも、意見を交わして企画する組織をつくらなければならない。

委員 行政はどうしても公平性を言われるが、今回のアンケートを活かして、何らかの戦略を立てるのが良いと思う。学校と結び付きたいのであれば、学校に対して大幅に減免措置を行うとか、子どもをたくさん集めたければ、利用を無料にするとかしても良いのではないか。子どものころから郷の音ホールに来ていたら、大きくなって施設を知らない、とはならない。

副委員長 三田市民は、クラシックが好きだとか、伝統芸能が好きだとかがアンケートの結果に表れているので、関連の人脈をつかまえて、実施していけるのではないか。いい人材は活用すべきである。

委員長 審議テーマについて、アトランダムな意見が出されたので、これらを事務局でまとめて、計画案に生かしてください。

事務局 あらゆる角度から活発なご意見をいただいた。分科会でもアンケートを活用しながら進めていきたい。

4 その他

(1) 次回（第4回）開催日程調整

(2) 第5回以降の日程調整方法について

服部委員：参加できない場合はズームでの参加も可能か。

事務局：検討

閉会（～11：55）

以上